



日本音楽教育学会ニュースレター 第83号

目次

1 学会からのお知らせ

1. 第52回大会のご案内..... 2
2. 第52回大会実行委員会から..... 田中多佳子 2

2 委員会からのお知らせ

1. 選挙管理委員会からの報告とお知らせ..... 高木夏奈子 3
2. 理事の被選挙権者辞退の申し出に關してのお願い..... 木村 充子 3
3. 編集委員会からのお知らせ..... 小川 容子 3
4. APSMER 2021 TOKYO のご案内..... 水戸 博道 4
5. 第16回音楽教育ゼミナール「英語で研究を海外に発信しよう!」を終えて...長谷川 諒 4
6. 『音楽教育研究ハンドブック』の活用(その1).....加藤富美子 5
木下 和彦 5

3 音楽教育の窓

1. 〈連載〉音楽・教育・学校(26)
偉人の至言に学ぶ..... 伊藤 誠 6
2. MEP (International Music Education Policy Group) online 会議(2020)について..... 南條 由起 7
3. SDGs と *Creativity in Music Education*..... 坪能由紀子 8

4 会員の声

1. ドイツでのオンライン実技レッスンの課題と音楽家メンタルトレーニング研究について.. 大木 美穂 9
2. 第16回音楽教育ゼミナール(オンライン)参加記..... 田舎片麻未 10
岡田 愛 10
尾瀨 千咲 10

5 会員の刊・近刊等紹介..... 11

6 報告

1. 2020年度 日本音楽教育学会 第4回常任理事会..... 12

7 事務局より..... 16

[編集後記]

1 学会からのお知らせ

1. 第52回大会のご案内

第52回大会（京都大会）は、10月16日（土）、17日（日）の2日間の開催を予定しています。現段階では、コロナ禍の収束状況を見通すことが難しいことから、多くの会員の皆さまに安心安全にご参加いただくことを第一と考え、第51回大会と同じくオンラインにて開催することとしました。

プログラムの内容は、① 研究発表（口頭）、② 共同企画、③ プロジェクト研究、④ 実行委員会企画等、大会参加費は、4,000円（正会員）となります。

研究発表（口頭）・共同企画に関する詳細（応募方法および発表方法等）、発表応募要領および参加申込登録についてのお知らせは、逐次学会のウェブサイトに掲載しますので、必ずご自身で確認していただきますようお願いいたします。

対面で集う機会を得られず残念なことではありますが、一方で、第51回大会では海外を含め遠方からもたくさんのご参加をいただき、オンライン開催のメリットが少なからずあったというお声もいただきました。今大会も、多くの皆さまにとって研究交流の貴重な場となりますことを願い、関係者一同、準備を進めてまいります。ご理解とご協力のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

2. 第52回大会実行委員会から

大会実行委員会委員長 田中 多佳子

一昨年、「皆さまを秋の京都にお迎えし、京都ならではの企画を！」と第51回実行委員会を立ち上げ具体的準備を進めておりましたが、ぎりぎりの時点で本部主催によるオンライン大会に代わりました。1年先送りし第52回に名を改めても、やはりオンライン開催するしかなかろうということになりました。当実行委員会にはそれが得意という人はいませんが、世の中も私たち自身もまた本学会も、否応なくオンラインという環境には慣れつつあり、さらに使いこなしてゆくしかないと腹をくくりました。

2日間、従来の規模での開催を目指すと共に、当初より実行委員会企画として温めてまいりました、京都の能楽師、河村晴久氏のご協力を得ての能のワークショップも、形を変えても実現させたいと思います。音楽も音楽教育もコロナ禍による受難の時を迎えております今、本学会こそが逆境をメリットに変えるような転換や新たな提案を試みる意義は大きいと存じます。

皆さまに安心して積極的にご参加いただけますよう、また参加して良かったと言っただけですよう、実行委員会一同、微力ながら知恵を振り絞り、総力を結集して準備してまいります。

皆さまのご理解とご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

2 委員会からのお知らせ

1. 選挙管理委員会からの報告とお知らせ

選挙管理委員会委員長 高木 夏奈子

第25期選挙管理委員として、味府美香、市川恵、木下和彦、高木夏奈子、山本幸正の5名が今川恭子会長から委嘱を受け、互選により高木が委員長、山本委員が副委員長に選出されました。

第25期日本音楽教育学会会長・理事選挙は、日本音楽教育学会会則、細則、選挙管理委員会規定、会長・理事選挙実施要領に則り2021年7月5日締切にて実施されます。この選挙によって、今後の学会活動の中心的役割を担う会長・理事を選出することになります。選挙管理委員会では新型コロナウイルス感染防止に留意しつつ、公正かつ正確な選挙事務の遂行に努めますので、ご理解とご協力をお願い申し上げます。

2. 理事の被選挙権者辞退の申し出に関してのお願い

事務局長 木村 充子

日本音楽教育学会第51回大会（2020年10月17日）の総会にて、日本音楽教育学会細則「第5章 役員の選挙に関する規則」第17条の一部改正が承認され、以下のように反映されました。

第17条 理事の被選挙権は、改選年度の2年前の年度会費納入者が有する。ただし、通算して理事を8期つとめた会員は、被選挙権者となることができない。また、理事選挙が行われる年度内に満70歳以上になる会員は、被選挙権者であることを辞退することができる。

2021年度は選挙の年にあたりますので、それに先立って選挙人名簿を確定する必要があります。

「通算して理事を8期つとめた会員」は事務局で把握できますが、「理事選挙が行われる年度内に満70歳以上になる会員」は、該当する会員ご自身が事務局に申し出いただくことになります。申し出の方法につきましては、同封の「理事の被選挙権者辞退の申し出に関してのお願い」をご覧ください。申し出期限を2021年4月20日（火）といたします。ご協力の程よろしくお願いいたします。

3. 編集委員会からのお知らせ

編集委員長 小川 容子

第4回編集委員会（2月11日 Teams オンライン会議）では、投稿原稿の採否について審議を行いました。その結果、『音楽教育学』に投稿され再査読となっていた研究論文1本が採択されました。また、『音楽教育学』への新規投稿の研究論文9本については再査読3本、6本が不採択となりました。同じく新規投稿の研究報告は3本が不採択となりました。オンライン会議が続いていますが、対面会議の時と同様に、一つひとつの原稿に時間をかけて編集委員全員で慎重に検討をしております。

昨年12月1日から電子投稿となっておりますが、ご質問等がありましたら、いつでも遠慮なく事務局にお問い合わせください。『音楽教育学』の直近の締切は5月15日です。多くの方の投稿をお待ちしております。

4. APSMER 2021 TOKYOのご案内

APSMER 2021 大会実行委員会委員長 水戸 博道

2021年9月18、19日にThe 13th Asia-Pacific Symposium for Music Education Research (APSMER)が東京(明治学院大学白金キャンパス)にて開催されます。9月の新型コロナウイルスの感染状況は想像がつかず、ご参加も悩ましいのではないのでしょうか。実行委員会でも、感染状況に応じてフレキシブルに対応できるよう、対面会議・オンライン会議の双方の開催準備を進めております。4月末には、開催方法を確定し、皆様にご案内差し上げる予定です。また、このような状況から、発表申し込みの締切も1か月伸ばして、3月末といたしました。

会議当日は、南フロリダ大学教授のVictor Fung氏、作曲家・尺八奏者としてご活躍の中村明一氏の基調講演をはじめとした学術的な研究成果の発表と共に、音楽教育の実践にかかわるワークショップやシンポジウムも多数行われます。学校や音楽教室の先生など、音楽教育実践者にとっても大きな収穫を得ることができるシンポジウムです。

会員の皆様の意欲的な研究を世界に発信するまたとない機会です。さらに、海外の研究者と直に意見交換するチャンスであるだけでなく、国内外の研究者と相互に協働したりネットワークを広げたりしていくきっかけになる場です。皆様、奮ってご参加ください。

5. 第16回音楽教育ゼミナール「英語で研究を海外に発信しよう!」を終えて

ゼミナール実行委員 長谷川 諒

隔年で開催されている学会主催のこのゼミナールだが、今年度はCOVID-19の影響を受け、オンラインでの開催となった。次回のAPSMERが東京で開催されるということもあってか、20名を超える熱心な参加者に恵まれた。ゼミナールの目的は本稿のタイトルにあるとおりである。

初日の基調講演は、ハダースフィールド大学の柴崎かがり先生にご担当いただいた。口頭発表やポスター発表をする際の具体的なティップスに加え、国際学会で発表する際のマインドについても言及していただき、国際学会経験の浅い多くの参加者にとってモチベーションが高まる機会になった。

柴崎先生のご講演内容を踏まえて実施されたグループセッションは、参加者2～3名に対して講師が1名つくという非常に手厚い体制のもと実施された。英文アブストラクトの完成を目標に、英語の言い回しについてレクチャーがあったり、研究内容自体についてディープな議論がなされたりと、参加者それぞれの課題に対してグループごとにローカルなアプローチがなされた。そして、各グループでの課題や成果が全体場で共有され、オンラインにも関わらずある種の連帯感を持って終了した。

今回のゼミナールは、APSMER 東京大会へのアプライを促進する狙いがあった一方で、「研究内容を日本語以外の思考原理で再構築しそれに対してアドバイスをもらう」という得難い経験を提供する機会にもなっていたように思う。グループワークを通して参加者の研究のフォーカスそのものがクリアになっていく様は、運営側から見ても非常に印象的であった。このゼミナールが参加者の国際的な活躍と音楽教育学研究のさらなる発展に寄与すれば、実行委員としてこれほど嬉しいことはない。

第16回音楽教育ゼミナール講師、実行委員一覧

講師：今田 匡彦、小川 容子、柴崎 かがり、菅 裕、水戸 博道、森尻 有貴

実行委員：今田 匡彦(委員長)、伊原 小百合、甲斐 万里子、木下 和彦、金 奎道
近藤 真子、高橋 憲人、千葉 修平、塚原 健太、坪能 由紀子、中村 昭彦
長谷川 諒、藤尾 かの子、松本 進乃助、松本 哲平、水戸 博道

6.『音楽教育研究ハンドブック』の活用（その1）

設立 50 周年記念出版編集委員会委員長 加藤 富美子

本学会設立 50 周年記念出版『音楽教育研究ハンドブック』（B5判・248 頁、音楽之友社刊、2019 年 10 月 5 日発行）は刊行から 2 年目を迎えようとしています。「第 1 部 音楽教育研究の視座」、「第 2 部 音楽教育研究の方法」、「第 3 部 音楽教育研究のフィールドと実際」の三部構成で、現代を見据えた音楽教育研究の視座、課題に向き合うための方法、実践を構造化する方法を示し、広く音楽教育研究の方法をとらえた我が国で唯一の書として、学部、大学院の授業等での活用が始まっています。

さらなる活用の拡がりを目指して、『音楽教育研究ハンドブック』の活用のポイントについて、各部の編集責任にあたった常任編集委員からのコメントをこれからニュースレターに掲載していく予定です。「ハンドブック」の「あとがき」に記したように、「音楽教育研究に携わるすべての方々にとって、その指針を探すための書となる」ことを目指します。

授業での活用例

筆者は、2020 年度よりある大学院で音楽教育学の授業を受け持つことになった。受講者は全員、音楽教育研究を始めたばかりの留学生という特殊な環境である。そこで、音楽教育学の概要と潮流を知ることができ、研究デザインや研究方法について学べるテキストはないか探した。それに該当する日本語の書物は、当ハンドブック以外に存在しなかった。

授業では、①～③の目的に沿って各自テキストから次の項目を選び、要約資料を作って全員で輪読していった。

①音楽教育学の主要なトピックを知り、研究者としての視点を養う

「人が音楽をすることと音楽教育研究」「人が奏でることの意味」「学校教育と音楽」
「文化の実践と教育研究」「音楽文化を継承すること」

②研究デザインの方法を知る

「研究の視点とリサーチ・クエスション」「研究計画とアプローチ」

③研究方法を学ぶ

「教育現場」「歴史からみる音楽教育」「実践の開発」「質的研究における記述」
「調査研究」「観察研究」「面接・インタビュー研究」

結果から言えば、当ハンドブックは、音楽教育学研究に着手したばかりの院生にとって、学問領域の全体像を掴み、研究者としての視点を養うのに有効であった。理解が及ばない概念や知らない人名を筆者が補足したり、自国と日本の音楽教育の違いを語り合ったりする中で、毎回アカデミックな議論が自然に生まれていった。研究方法に関しては他の文献と併せて理解することが必要だが、いずれにせよ、大学院教育の導入教材としての役割は十分に果たしていたと思われる。

院生が音楽教育研究者としての視座や能力を身につけることは、国立大学の教職大学院化が進む今日でも変わらず重要である。本学会には、当ハンドブックのように研究者養成課程の授業にも活用できる書籍を出版することが引き続き求められるだろう。

木下 和彦（淑徳大学）

3 音楽教育の窓

〈連載〉音楽・教育・学校 (26)

1. 偉人の至言に学ぶ

伊藤 誠 (埼玉大学名誉教授)

「あなたの座右の銘は何ですか」と問われたら、迷わず日本画家・奥村土牛^{とぎゅう}が85歳のときに残した至言をあげたいと思います。それは「芸術に完成はあり得ない。要はどこまで大きく未完成で終わるかである」という言葉です。明治から平成まで4つの時代を生き、30年ほど前に101歳で亡くなった人です。自責の念に駆られることなく、己の未熟さを、むしろ肯定するかのような余韻が漂います。老人特有の「悟りの境地」と言ってしまうとそれまでかもしれません。しかし一本の道を極めた一人の芸術家でなければ言えない奥深い心理を強烈に感じます。

自分が演奏会のステージに立つとき、この凄まじいほどの境地（少々大袈裟？）に、少しでもあやかりたいと思いました。毎年12月に大学主催で開かれた『音楽の贈りもの』と題したコンサート.... 万全を尽くして臨むのですが、終演後はいつも反省ばかりが残りました。教員にとっては楽しみな機会であるはずですが、日頃の指導を通して学生たちに伝えている芸術への姿勢を、この日ばかりは自らの演奏によって示さなければなりません。今となっては懐かしい思い出ですが、“本物をどう伝えるか”という難題を常に追い求めた35年間（名古屋音楽大学に10年、埼玉大学に25年勤務）でした。

さて私の研究テーマは「教員養成におけるヴァイオリン導入期教材の選曲意図とアレンジの工夫—アンサンブル活動の実践を通して—」です。限られた授業時数の中で学生たちの進捗を予測しつつ、指導手順や内容を考慮してカリキュラムを編成しました。掲載した写真（両者とも）は、私にとって最終年度の授業の一コマです（令和元年7月に撮影）。

この演習の主なねらいは、長い歴史を持つヴァイオリンの奥義（弦楽器の醍醐味）を、特に聴覚と触覚を通して味わってもらうことでした。時代の表現様式を持つ美の追求によって、人間



が作り出した芸術から生まれたヴァイオリン....いつの間にか、自分が教える技量は本物かどうか、この授業の環境条件の中で満足できる指導法とは何か、研究を通して自問自答を繰り返していたように思います。

「楽器」のことで一言。20年ほど前になりますが、戦後7度目の改訂となった学習指導要領（平成14年全面実施）の時代、中学校では音楽の授業に和楽器の使用が義務付けられました。このとき、デザインや機能に工夫を凝らした現代版モデルなる和楽器が続々登場したことは周知の通りですね。ギター感覚で糸締めが可能な箏、購入したその日から音が出る合成樹脂で作られた尺八、等々。「学校で邦楽が教えられることで“学校邦楽”のようなものが作られてしまう」と訴える専門家たちの悲痛な叫びを綴った新聞記事が記憶に蘇ります。

クリック一つで美しい音が出せる現代ですが、楽器とは一体何なのか、楽器はどう扱うべきか....。学生たちのレポートからは、作音楽器の扱い方を真剣に考える機会になったこと、器楽指導を行う際に心がけること等、楽器への思いについて多くの意見や感想が綴られていました。

2. MEP (International Music Education Policy Group) online 会議 (2020) について

南條 由起 (ヴァイオリニスト, ワークショップデザイナー)

2020 年 10 月 28～30 日, MEP (International Music Education Policy Group : 音楽教育政策グループ) の会議が online で行われた。MEP は 2019 年に Dr. Erica Eyrich (独) を中心に設立された国際的な専門家団体で, ISME のパートナーシップ会員でもある。メンバーには, ISME の会長をはじめ, イェール大学音楽院, シベリウス音楽院, ロシア音楽教育学会他, 世界各国の音楽系大学や機関のトップ, 責任者, 教授らがあり, 坪能由紀子氏と彼女が代表をつとめる Institute of Creativity in Music Education (新しい音楽教育を考える会) も一員である。3 日間に及ぶ会議には, 日本から坪能氏と筆者が参加した。タイトルは「パンデミック後の世界における音楽教育政策を再考する」で, シベリウス音楽院学部長, アーツ・カウンシル責任者らが司会をつとめ, イェール大学音楽院副学部長, モスクワ文化芸術大学ピアノ部門長, エル・システム COO 他, 計 6 名が基調講演を行った。講演後, 聴講者と共に議論が繰り広げられた。ここでは MEP 主催者の Dr. Eyrich から届いた議事録をもとに, この会議内容の概略を紹介したい。全体としては, 1. パンデミックによって引き起こされた変化・リスク・機会, 2. 今後の推奨される行動について, 2 つに分けて述べられている。

1. オンライン配信により, 学生に聴きとりや自己監視スキル向上を促し, 学生中心学習と自律性を高め, 自身の「声」を見つけることが可能となる。特に音楽配信は, デジタルベースの音楽スタイルやジャンルの探求に役立つため, 学生が「文化的資本」を利用し, 文化的伝統を引き出す機会を提供できる。音楽業界でのキャリアに役立つ知識能力を取得する学生を増やすことができる (例: 音響技師, デジタル制作, 作詞作曲など)。遠隔地にいる学生や障害のある人々との繋がりを改善し, 異文化の協働を促進することで, より多様な視聴者に届けるための取り組みを加速させることができる。一方, 初心者や, やる気のない学生にとっては問題になることが多く, デジタル技術や新しい方法論, 教師の役割においてあまり精通していない教師とアーティストにとって大きな課題である。さらに, デジタル機器の利用やネット環境問題が参加の不平等を助長させた。アンサンブル演奏に関する遅延の問題, 音質, 身体言語による伝達など, 芸術的な課題をもたらした。今後数年間で, 音楽的能力知識を極めた音楽従事者が減少し「失われた世代」に繋がる恐れがある。景気の悪化や学校閉鎖による時間削減は, 芸術系科目よりも STEM 系科目の優先順位をさらに高める懸念がある。

2. ハイブリッドモデルへの移行は, パンデミック後も持続する可能性が高いという一般的な合意がある。変化や異なるシナリオを評価し前進するために, 研究や検証を国際的に共有する手段が必要である。これは中長期的な支援活動の他, 未来像, 戦略, 政策を策定するために重要である。高等音楽教育機関, 学校, 民間の教師を含む全関係者は, パンデミック後の音楽教育部門がどのようにあるべきかについての戦略的未来像を策定し, 政策提言を含めてその目的に向けた展開を支援する必要がある。その際, 学生から学び, 教育的, 芸術的に有意義な戦略的な会話をし, 音楽制作と学習に本来備わっている人間的・社会的相互作用を可能にすること, 既存の技術を使用する創造的な方法を見つけること, 音楽における学生の成績を評価する新しい方法を見つけることなどが大事である。我々はパンデミックを 1 つの機会と捉え, 幸福, 健康, 癒しに対する音楽と音楽教育の重要性を強調し, 生命線として我々と音楽と結び付け, 国際協力を促進すべきである。また, 景気の悪化状況を鑑み, 音楽部門全体の貢献と GDP への「創造性」貢献を強調することも検討すべきである。音楽家や教育者がより良い支援者 (人の力) になるための支援方法を探し続けなければならない。

3. SDGs と *Creativity in Music Education*

坪能 由紀子（日本女子大学名誉教授、「新しい音楽教育を考える会」代表）

SDGs は、2015 年に国連サミットで採択された 17 のゴールから成る Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）であり、この取り組みの過程では「誰一人取り残さない」（No one will be left behind）ことが謳われている。一方、*Creativity in Music Education*¹⁾（坪能，大家まゆみ，Ai-Girl Tan 編）は、2014 年に日本女子大学において開催された国際学会 “Creativity Conference”（日本女子大学、「新しい音楽教育を考える会」共催）での発表をもとに、2019 年に Springer 社から発行された論文集である。音楽教育における創造性について書かれた 19 本の論文で構成されている。

この本が、国連の「SDGs 4：質の高い教育をすべての人に」カテゴリーで、2020 年 1 月から 9 月までもっともよく読まれた本であったと出版元の Springer 社から編著者 3 人に連絡があった。この知らせが Springer Nature を通じて筆者のところに来たのは 2020 年 12 月であったが、翌 2021 年 1 月には、今度は Web of Science から “The Web of Science Core Collection” に同書が収録されたとの知らせが届いた。これはアメリカの電子データベースで、世界でも最先端の科学論文や書籍情報を収録しているとされ、日本でも多くの国立大学等で利用されている。

もともと *Creativity in Music Education* は SDGs 4 に合わせて書いたものではなく、Springer からの知らせが来た時には驚愕したが、しかし考えてみれば、筆者が 50 年来取り組んできた「誰にでもできる音楽づくり」（Everyone can create music）はまさに “No one will be left behind” をめざしたものであると言えるだろう。また、本書には日本をはじめとするアジアを中心にした創造的な音楽教育の実践や研究が掲載されている。主に日本の音楽教育、それも「音楽づくり」や「創造性」について英語で書かれた本が世界に紹介されたことは今までになかったということを考えれば、欧米の研究者から大きな関心を寄せられた理由も納得できる。

本書 19 本の学術論文のうち 11 本が日本音楽教育学会会員（旧会員含む）によって執筆されているので、ここに紹介したい。

近藤 真子（他）	Learner Agency in Musical Creative Process and Learning
今田 匡彦	Soundscape, Sound Education, and the Grain of the Music: Experiencing the Luminousness of Music Being What It Is
駒 久美子	Exploring Children’s Creative Musical Conversations Using the Tambourine
若尾 裕	Toward Ecological Music Education: Thinking from the Batesonian–Deleuzian Views
松信 浩二	Creativity and Embodiment in Pre-modern Japan and Twenty-First Century (North) America
木間 英子	Creativity in Music Education from 1890s to 1930s in Japan
大竹 紀子	Rethinking Takemitsu Through Creative Music Activities: Application of the Materials in His Piano Music
坪能 由紀子	The Clues of Understanding and Creating Music
権藤 敦子	Creativity, Change in Music Culture, and What Children’s Song Should be
高須 一（他）	Creativity in the Japanese National Curriculum for Music
水戸 博道	Developing Creativity in Musical Performance: An Analysis of Famous Musician’s Autobiographies

¹⁾ Springer, 2019. ISBN 978-981-13-2749-0（ハードカバー版・e Book 版）

4 会員の声

1. ドイツでのオンライン実技レッスンの課題と 音楽家メンタルトレーニング研究について

大木 美穂（エアフルト大学）

昨年、全世界で疫病の流行が始まり、学会大会や仕事の多くはオンラインへ切り替わり、私たちの生活に大きな変化をもたらしました。ドイツでは昨年の3月そして12月に2回のロックダウンがあり、2回目のロックダウンは今この記事を執筆している2021年1月現在も続いています。私が住んでいる街、ハレ（ザーレ）は、作曲家ヘンデルの生まれ故郷でもあり、ヘンデル音楽祭という大きな行事が毎年初夏に開催され街中が世界中から来る音楽家や聴衆で賑わいますが、2020年はそのような伝統ある行事も中止となりました。

私が講師としてピアノと室内楽の指導に携わっているエアフルト大学では前後期ともに、実技レッスンや入試、学期末試験を含むほぼ全ての授業をオンラインに切り替えてきました。私自身はオンラインで音楽の実技レッスンをするのは初めての試みで、試行錯誤しつつも実際にやってみるとオンラインでも伝えられることは想像以上に沢山あると気付いた反面、実技レッスンに関しては少なくとも現状のビデオ通話形態中ではまだ難しい部分もあるように感じています。たとえばピアノを弾くときの姿勢や身体の使い方、そして繊細なニュアンスや響きの美しさなどは実際の対面レッスンのの方が伝わりやすいですし、ビデオ通話だと僅かな時間差があるため、曲の中で同時に指示を出す、歌うといったレッスン形態を、現状のビデオ通話でもできるオンライン指導法に切り替える必要性が出てきます。場を共有することで伝わる音楽体験や演奏中に伝わってくる空気感もコンピューター画面からは伝わりにくく、先生側も生徒側もより一層想像力を働かせることや言葉を使った描写力を高めること、そして五感を使う努力が求められます。現状ではまだ音楽を同じ空間で体験する対面レッスンと全く同じレッスンとはなりません、今後のテクノロジーの更なる発展と私たちの創造性によって、両レッスン形態を状況や場面によって柔軟に取り入れていくことが今後の課題となっていくと感じています。

大学でレッスンをする傍ら、私は現在マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルクにて「メンタルトレーニングの音楽への応用」をテーマに博士論文を執筆しています。特にスポーツ心理学の分野で発展してきた心理スキルトレーニングを、音楽家や音楽愛好家の皆さんがどう日々の生活に取り入れていくことができるかについて研究しています。私自身長年悩んでいたあがり症を克服してきたという経験があり、この研究は特にあがり症などや本番で実力を発揮できないことに悩んでいる方やそのような悩みを抱える生徒さんがいる指導者の方々に有効であると信じています。現在保育園を含むロックダウンが続く中、2歳の娘の子育てと大学講師としての仕事と博士課程という3本柱の生活の中で、精神的にも比較的前向きに生活できているのは、家族や周りの方々のサポートのおかげもありますが、博士論文のテーマがメンタルに関する内容を扱っているからであるとも感じます。研究はビジュアライゼーションを用いたメンタル練習法、リラクセーション、一部モチベーション心理学や行動認知学、そして禅などの内容も含んでおり、その多くは音楽家の日々の練習やパフォーマンスに向けての準備に寄与できる内容であると感じています。自分自身もこの研究プロジェクトにメンタルトレーニングを応用させながら、これらをどう音楽教育の実践に落とし込んでいくかについて考察しつつ、引き続き音楽をする人にとって役立つような論文にまとめていきたいと思っています。

2. 第16回音楽教育ゼミナール(オンライン)「英語で研究を海外に発信しよう！」参加記

田舎片 麻未（東京藝術大学大学院生）

以前から英語での発信に興味をもっていました。英語話者である研究協力者に有意義な報告をしたいという最近湧きあがってきた気持ちも相まって、今回のゼミナールへの参加を決意しました。

冒頭で行われた基調講演では、柴崎かがり先生（University of Huddersfield）が、ご自身の経験を交えて、英語で発表する際の心構えから言葉選びのポイントまで詳しくお話をくださいました。その後、森尻有貴先生（東京学芸大学）のグループにて受講したワークショップでは、研究内容を英語でどのように表現するべきか吟味することを通して、何を伝えたいのかという基本に立ち返るきっかけをいただいたように思います。また、模擬的な実践を踏まえてご指導いただいたことで、海外への発信を以前よりも身近なものとして捉えられるようになったと感じています。

オンライン開催ではありましたが、終始温かく充実したひと時をつくってくださった講師の先生方、実行委員会の先生方には、感謝の気持ちでいっぱいです。2日間本当にありがとうございました。

岡田 愛（東京学芸大学大学院生）

英語での研究発表に志があり、第16回音楽教育ゼミナールに参加させていただきました。会議アプリ Zoom を活用したゼミナールでは、とても有意義な基調講演やレクチャーを受講できたり、少人数のグループに分かれて個人指導をいただけたりと、贅沢な学びの時を過ごすことができました。そしてグループワークでは、Abstract を書くための個人指導はもちろん、英語のスライドを使っのプレゼンテーション、英語による質疑応答も経験させていただけるなど、このゼミナールだからこそ得られる機会を多く頂戴しました。また同じ志を持つ受講生の皆様から刺激を受け、自身のモチベーションもさらに高まりました。時間はあっという間に過ぎゆき、ゼミナールがもっと続いてほしいと願わずにはいられないほど、充実した2日間となりました。貴重な機会にご指導をいただいた感謝の気持ちを胸に、国際的な研究発表の舞台に1日も早く立つことができますよう、挑戦を重ねて参ります。最後になりましたが、ご指導ならびに運営をくださいました先生方に、心より御礼申し上げます。

尾瀨 千咲（広島大学大学院生）

今回のオンラインゼミナールでは、柴崎かがり先生の基調講演とレクチャーを拝聴し、その後2日間にわたりグループワークにて英語のアブストラクトの作成をご指導いただきました。海外に向けて研究を発信するためには、自分が所属するコミュニティの研究文化が「あたりまえ」ではない環境で、どのように研究成果を共有できるのか、考えることが必要であると実感しました。大変充実した学びの機会をいただき、ご指導いただいた先生方、また実行委員の先生方に心より感謝申し上げます。

実際に英語のアブストラクトを作成したワークショップでは、文章構成や表現の明確さを追究する過程で、自分が普段使用していた日本語表現の曖昧さを自覚できました。また、海外の研究者と共有することを前提に自分の研究を検討することで、研究内容や研究の基盤となる自身の研究者としてのアイデンティティがより明確になることを実感しました。今回のゼミナールを通じ、積極的に海外の研究者との交流をもてる場に参加したいという意欲が湧いてきました。

5 会員の新刊・近刊等紹介

- ★小梨貴弘著『こなっしーの音楽授業をステキにする 100 のアイデア』(音楽科授業サポート BOOKS)
明治図書出版 2020/10/9 A5判・144 頁 ISBN : 978-4-18-316914-3 [本体 2,000 円+税]
音楽教師の諸業務(教科指導, 評価, 音楽室経営, 行事, 課外活動, ICT 活用, 人間関係づくり...
等々)に関し, 筆者が行ってきた実践のノウハウを紹介。明日から使える様々なアイデアが満載。
- ★音楽鑑賞教育実践研究会著/音楽鑑賞振興財団発行/山本幸正/鶴岡翔太他『主体的・協働的な学
びを促す音楽鑑賞指導の研究—学びのデザインの視点に基づく授業づくりと実践を通して—』(音
楽教育研究報告 31) 音楽鑑賞振興財団 2021/1/29 A4判・124 頁 ISBN : 978-4871350198 [本
体 1,600 円+税]
2 年間にわたる実践研究の報告書である。機能的関係概念としての教材観を踏まえ, 教材研究を「学
びのデザイン」と定義するとともに, 「学びのデザインシート」による鑑賞の授業を提案している。
- ★笹野恵理子著『学校音楽の「カリキュラム経験」—潜在のカリキュラムの生成過程—』多賀出版
2021/2/20 A5判・373 頁 ISBN : 978-4811580210 [本体 6,000+税]
学校という場で営まれる音楽を通して, 人はどのような「経験」を編むのか。この問いにたつて,
「当事者」である学校成員の側から, 学校音楽の「生きた姿」を描き出そうとした一書。
- ★伊原小百合著『探索して音に出会う—音・楽器で遊ぶ幼児の事例から—』みらい 2021/2/22 A4
判・215 頁 ISBN : 978-4860155315 [本体 5,100 円+税]
幼児期の音楽経験のあり方を問い直す一冊。保育現場での縦断的なフィールドワークで得られた無
数の事例から, 音や楽器で遊ぶ幼児の姿を取り上げ, 探索的に音とかわる幼児の経験を描き出し
た。

次号のニュースレターはオンラインでお届けします！

2021 年 5 月 18 日発行 ニュースレター第 84 号は, ウェブ版のみのお届けです。
紙媒体での次のお届けは, 8 月末の第 85 号となります。

ウェブ版の会員用ニュースレターは, 学会ウェブサイトの「マイページ」にアクセスしてご覧ください。ウェブ版の一般公開用は, 従来通り, トップページにある「ニュースレター」のバナー, または, 「Topics 更新情報」からご覧いただけます。ウェブメディアのよさを生かした情報発信を目指します。引き続き皆様のご投稿をお待ちしております。

「会員の新刊・近刊等紹介」では, 書籍, CD, DVD などの新刊・近刊・リリースについて, 基本的な書籍情報, 音源等の情報に加えて, 「である調」90 字程度の紹介文をお送りください。

☛ (半角) onkyoiku@remus.dti.ne.jp

6 報告

1. 2020 年度 第4回常任理事会

日 時：2021 年 2月 20 日（土）10:00～11:45

場 所：オンライン開催（Zoom）

出席者：今川、本多、木村、石上、小川、権藤、佐野、杉江、水戸、齊藤（記録）

【会務報告】〈2020 年 10 月 16 日以降〉（木村）

2020 年

10 月 16 日 2020 年度第3回常任理事会・第2回理事会

10 月 17 日 日本音楽教育学会第 51 回大会（オンライン大会）

12 月 31 日 『音楽教育実践ジャーナル』vol. 18, ニュースレター第 82 号発送

2021 年

2 月 11 日 2020 年度第4回編集委員会（Web 会議）

2 月 20 日 2020 年度第4回常任理事会（Web 会議）

【メール審議の報告】〈2020 年 10 月 16 日以降〉（木村）

- ・「教科教育学コンソーシアム」（教科教育学学会の呼びかけによる新規設立）に本学会も加盟し、本学会からは菅裕会員に教科教育学コンソーシアム担当をお願いすることを確認した。
- ・地区移動に伴う理事辞退願いが提出されたことに伴い、細則第 23 条および会則第 11 条の 3, 4 に従い欠員補充を行うことを確認した。

【審議事項】

1. 新入会員及び退会者について（木村）※15 ページ参照

資料に基づき、2020 年 10 月 16 日以降、正会員新入会 11 名、学生会員新入会員 2 名、正会員申出退会 4 名、正会員申出退会予定者 10 名、自然退会の可能性がある会員 61 名であることが報告され、承認された。

再入会希望者について審議・承認され、引き続き理事会 ML にて承認を得ることとした。

（2021 年 2 月 19 日現在 正会員 1,603 名、学生会員 3 名、名誉会員 2 名、特別会員 3 名）

2. 2021 年度補正予算案にむけて（杉江）

新型コロナの状況を見ながら、第 52 回大会（京都大会）の開催方法がほぼ確定したところで、2021 年度補正予算案について提案する予定であることを確認した。

3. 第 52 回大会（京都大会）について

第 52 回大会（京都大会）の開催方法について京都大会実行委員会と調整中であるが、オンライン開催を前提として検討を進めることについて、今川会長より報告があった。

(1) 開催日程および開催方法・会員への周知（木村）

2021 年 10 月 16 日（土）、17 日（日）の 2 日開催の予定。オンライン開催とする。

会員の大会参加費は4,000円とする。非会員についても希望者は参加できるように調整する。

(2) **大会実行委員会との覚書** (木村)

資料に基づき、「大会開催についての学会本部と大会実行委員会との覚え書き」を確認した。

(3) **大会準備日程** (木村)

資料に基づき、第52回大会(京都大会)の準備日程を確認した。

(4) **大会発表応募要領・大会発表に関する内規** (木村)

会員の研究発表については「口頭発表」「共同企画」の応募を予定している。なお、「共同企画」の実施方法について実行委員会を交えて協議することとした。

(5) **大会参加登録システム** (木村)

東武トップツアーズ株式会社に引き続き依頼する予定である。

(6) **大会日程等** (佐野)

京都大会実行委員会と調整を進めることを確認した。

(7) **常任理事会企画プロジェクト研究** (石上・佐野)

2020年度に続く企画で「小・中学校の連携を踏まえた音楽科授業の実践研究」の2年目となる。音楽づくり・創作に鑑賞を加えていく。常任理事会企画は、この1本とする予定である。

(8) **大会実行委員会企画** (杉江)

京都ならではの我が国の伝統音楽に焦点を当てた大会実行委員会企画を検討している。シンポジウム、講演会、アトラクション、懇親会は行わない予定である。院生フォーラムについては実施可能であるか検討する。

4. **2021年度ワークショップについて** (石上・佐野)

2021年度ワークショップについては検討中であることを確認した。

5. **第53回大会候補地について** (今川)

第53回大会は関東地区で開催予定であることを確認した。

6. **APSMER 2021 TOKYO 開催について** (水戸)

APSMER 2021 TOKYO (2021年9月18日、19日)の開催方法(対面かオンライン)については、4月中に決定する予定であることを確認した。

7. **採否決定のための臨時委員会立ち上げについて** (小川)

『音楽教育実践ジャーナル』への現編集委員による投稿の採否決定に関わり、臨時委員会を立ち上げることになり、常任理事から委員を選出した。

8. **その他** (今川)

参事について提案があり、松本哲平会員に委嘱することが承認された。

本学会における会議の開催方法については、今後もオンライン会議を推奨することを確認した。

【報告事項】

1. 第51回大会（オンライン大会）会計報告（国府→杉江）

資料に基づき、「第51回大会（オンライン大会）」について報告された。

第51回大会 オンライン大会収支報告

【収入の部】

費 目	金額 (円)	備 考
実行委員会経費	300,000	
広告料	199,670	8 社
合 計	499,670	

【支出の部】

費 目	金額 (円)	備 考
システム登録料	44,550	@2,700×15 台+消費税
信州大学施設使用料	27,000	@1,500×18h ※備品使用代を含む
ICT 専門員謝金	30,000	@10,000×3 日
HP 作成謝金	50,000	
オンライン開催業務謝金	20,000	
信州大学会議費	20,000	
学生アルバイト謝金	94,000	@1,000×94h×12 名
消耗品費	71,900	※消毒液、ヘッドセット、レンタル携帯等
諸経費	34,492	※印刷代、通信費、トナー代、交通費、手数料等
学会本部への返金	107,728	
合 計	499,670	

2. 第16回音楽教育ゼミナール報告（今田→木村）

資料に基づき、「第16回音楽教育ゼミナール」について報告された。

第16回音楽教育ゼミナール（オンラインゼミナール）会計報告

【収入の部】

費 目	金額 (円)	備 考
学会より補助金	150,000	
合 計	150,000	

【支出の部】

費 目	金額 (円)	備 考
Zoom 契約料	30,090	初のオンライン開催であることを踏まえ、不測の事態を想定した予備日程の設定および各ルームの記録動画の確認と写真抽出のために2ヶ月間借用した。 ・1,355×1 ルーム+税 135=1,490 ・2,000×6 ルーム+税 1,200=13,200 ・更新料 2,000×7 ルーム+税 1,400=15,400
振り込み手数料	660	・Zoom 契約料立替者への送金時 660×1 件=660
学会本部への返金	119,250	
合 計	150,000	

3. 2020 年度会計中間報告（杉江）

資料に基づき、2020 年度会計中間報告について報告された。

4. 各委員会等報告

(1) 編集委員会（小川）

資料に基づき、第 4 回編集委員会の審議の結果が報告された。

(2) 広報委員会（榎藤）

資料に基づき、ニュースレター第 83 号の内容や進捗状況について報告された。

(3) 選挙管理委員会（高木→木村）

資料に基づき、第 25 期 会長・理事選挙の日程について報告された。

(4) 学会賞について（今川）

学会賞の選考にあたり学会賞審査委員会を 3 月中に開催する予定であることが報告された。

5. 理事の被選挙権について（木村）

資料に基づき、「理事の被選挙権辞退の申し出に関わるお願い」の周知について報告された。

※【審議事項】 1. 新入会員及び退会者について（資料）

（2021 年 2 月 19 日現在 正会員 1,603 名，学生会員 3 名，名誉会員 2 名，特別会員 3 名）

◆正会員 新入会員・再入会員（2020 年 10 月 16 日理事会以降）

個人情報保護のため削除しました

正会員新入会 11 名 再入会 1 名

◆学生会員 新入会員（2020 年 10 月 16 日理事会以降）

個人情報保護のため削除しました

学生会員新入会 2 名

〈次回会議の予定〉

2021 年度第 1 回理事会・常任理事会 4 月 24 日（土）13 時～16 時 オンライン開催（Zoom）

7 事務局より

事務局長 木村 充子

1. 第52回大会について

2ページでご案内しましたとおり、第52回大会(京都大会)は、オンラインにて、10月16日(土)、17日(日)の2日間の開催を予定しています。大会参加費は4,000円(正会員)となります。研究発表(口頭)・共同企画の応募方法および発表方法、参加申込登録等につきましては、逐次学会のウェブサイトに掲載しますので、必ずご自身で確認してください。

2. 年度会費納入のお願い

2021年度会費は7,000円、納入期限は5月31日です。期限内に会費を納めなければ、その後の送付物、研究発表や論文投稿に支障が出る場合があります。なお、2年間会費を滞納すると自然退会となりますのでご注意ください。大会での発表を予定されている方は2021年度までの会費を5月末日までに納入する必要があります。入会して発表することを希望される方は5月末日までに入会申込と会費納入を完了してから応募してください。

3. 事務局について

新型コロナウイルスの影響拡大に鑑み、事務局に原則としてスタッフは出勤しておりません。ご用件はEメールにてお願いいたします。ただし、お返事までに数日かかることがあります。ご了承ください。

4. メールアドレスの登録、住所・所属先の確認・変更のお願い

学会業務全体の電子化に伴い、会員の皆さまと事務局との連絡方法を電話やFaxではなく、Eメールで行うよう移行しております。まだメールアドレスをご登録でない方は、至急、事務局 onkyoiku@remus.dti.ne.jp (半角)宛にメールにてお知らせください。メールアドレスをご登録いただいていない会員は「マイページ」にアクセスしていただくことができません。なお、「マイページ」のご利用方法についてはニュースレター第82号4～6ページをご覧ください。選挙が行われますので、住所や所属等の変更がある場合は速やかにお願いたします。

【編集後記】

振り返ってみますと、新型コロナウイルス感染症の影響を受けながらも、会員の皆様からの多くの貴重な情報等によって、ニュースレターを介してこれからの音楽教育の在り方を見つめ直すことができた1年でもありました。本当にありがとうございました。来年度は、先に示しました通りウェブ版会員用ニュースレターがスタートします。タイムリーな活動・情報交流が活性化するように広報委員一同努めて参ります。皆様のご投稿をお待ちしています。(早川 倫子)

【日本音楽教育学会事務局】※新型コロナウイルスの影響拡大に鑑み、事務局開局の状況が不規則となる場合があります。

所在地：〒184-0004 東京都小金井市本町 5-38-10-206 Tel. & Fax. : 042-381-3562

E-mail : (半角) onkyoiku@remus.dti.ne.jp

私 書 箱 : 〒184-8799 東京都小金井郵便局私書箱 26*郵便物は私書箱へ

開局日時：月・水・木 9:00 ～ 15:00 事務局員：亀山・若尾・宇田川・徳山